

神奈川県内大学図書館
相互協力協議会

会報

平成20(2008)年11月1日 第40号
編集・発行 神奈川県内大学図書館
相互協力協議会
平成20年度事務局 〒223-8522 横浜市港北区日吉3-14-1
慶應義塾大学理工学メディアセンター
電話 045(566)1475
<http://www.kulc.net/>
e-mail:kulc-office@kulc.net
印刷 株式会社 ワキプリントピア
電話 0466(87)5811

◇平成20年度総会報告◇

平成20年度総会は、5月22日(木)午後1時30分から慶應義塾大学理工学部キャンパス
厚生棟3階中会議室において開催されました。

平成19年度報告、平成20年度計画の協議がなされました。また、共通閲覧証について
各図書館の現状報告の後、協議会の将来の方向性も含めて検討事項とすることが確認され
ました。

総会議事後には講演会を設定し、慶應義塾大学教養研究センターの横山千晶氏より「学
生の『居場所』を考えるー学びの場・生活の場としての図書館」と題してお話いただきまし
た。

横山氏にご寄稿いただいた講演要旨と議事概要を以下に掲載いたします。

また、閉会后、慶應義塾大学理工学メディアセンターの見学会が行われました。

◆講演：学生の『居場所』を考える ー 学びの場・生活の場としての図書館

慶應義塾大学教養研究センター
横山千晶

1. 変わる学習環境・生活環境

大学に入ると必ずオリエンテーションで訪れ
る図書館。実に丁寧に図書館の役割と建物の中
を紹介してもらえるにもかかわらず、図書館で
何ができるのか、ということに関しては学生た
ちの認識は驚くほど限られてしまっている。つ
まり本がある、コンピューターが使える、映画
やオーディオ資料がある、自習に使える、程度
なのである。一方学生の大学図書館に対するイ

メージはどのようなものか、ということこれもま
た否定的・限定的なものが目につく。つまり図書
館は騒いではいけないところであり、置いてあ
る本はお堅い学術書中心で最近流行している気
軽に読めるような本はおいていない、そして図
書館は基本的に勉強する場所であるので、友達
と待ち合わせたり、気軽に話しをしたりする場
所として使うことはあまりない、といった具合
である。

驚くべきことは、学生の学習環境や、生活環境は年々大きく変化していつているにもかかわらず図書館に対する概念は、学生も(そして教員も)さほど変わっていない。

いまさらいうまでもないが、学生の学習環境・生活環境は1年単位、いやともすると半年単位で大きく変わっていく。我々40代の教員が学生だったころと比較してみると、まず第一に挙げられる変化は、情報源の多様化である。今では何か調べるときに身近な人々にたずねたり、図書館に赴く前に学生たちはコンピューターのキーをたたく。レポートの作成で教員が一番頭を悩ませるのは、いわゆるインターネットの情報からのコピー・アンド・ペーストである。いままでは研究者にとってもインターネットはなくてはならない。図書館で本を調べる前にまずインターネットで基本的な情報を頭に入れておくことは多くの研究者の日常のプロセスになっている。

このことはコミュニケーションの形態の変化にもつながっている。携帯電話、Eメール、チャット、mixiなどで情報を得、意見交換を行いつつ、コミュニケーションの形態と方法も相手に、そして目的に合わせて使い分ける。それだけではない。バーチャルなコミュニケーションでは、学生たちは自分のアイデンティティすら使い分けながら、相手が本当は誰であるのかを知らなくとも意思伝達が可能な時代に生きている。

どこでもいつでも他人につながることでできる時代、しかも複数の自分になれる時代では、次第に公私の時間の区別がつかなくなってきたことも事実である。すでに家の中に置き電話がなく、それぞれの個人が自分の携帯電話を持って外とつながっているという家庭も出てきている。昔は友人に電話をかけるときは、直接自宅に電話をかけるために、友人の家族とも知り合うことが多かった。こういったことも昔のことになりつつある。食事中も家族間で会話をすることなく、親はテレビを見、子供は携帯電話にかかりきりという場面は日常の家族の光景のひとつとなっている。家族の間でそれぞれの

交友関係がわからないだけではない。同じ家族の間でも、お互い面と向かって話すのが難しく、携帯電話で初めて気持ちを通じ合える、ということすら不思議ではなくなっている。対面のコミュニケーションが気恥ずかしいのだ。

このようなコミュニケーションの変化は、人間関係の変化や感情表現の変化にもつながっている。対面的なコミュニケーションが難しくなっているだけではない。スクリーンを通してのコミュニケーションは、好きなときに会話をやめることができ、コミュニケーションの間隔が短く頻繁であるために、時間をかけて話し合うということがなくなっているともいわれる。一概に「キレる」若者の存在を現代の傾向の中だけに押し込めることはできないだろうが、間違いなくコミュニケーションの変化は学生の精神的な変化や表現力の変化へとつながっているといえよう。

もちろんこのようなコミュニケーションの変化は学習環境と大学の授業そのものを大きく変えつつある。現に教育の現場ではクラスの中だけでなく、インターネットや遠隔授業を使いながら、クラス外の授業が可能である。クラス内でも、さまざまなメディアを使うことがほぼ必須となってきている。オーディオ・ビジュアルの資料を用い、パワーポイントを駆使しながら言葉によるプレゼンテーションだけでなく、視覚的に訴える必要がある。そのようなビジュアルなサポートを学生もまた望んでいるのだ。また授業は映像としてそのまま記録して、ストリーミングによって、学生はいつでも好きなときに聴講することが可能にもなっている。さまざまな遠隔授業のマテリアルも増え、自律学習・自立学習の環境も整えられていつている。またテレビ会議システムの充実によって海外との研究者や学生とも画面を通してつながることができるようになり、おかげで授業内容はますます豊かになっている。

2. 新しい学びのスキルとは？

つまり現代はコミュニケーションにおいても学習環境においても、文字情報と視覚的な情報を自在に駆使することが望まれる時代となっているのだ。授業で課されるそれらの課題は、そのまま学生が社会に出るときに課されることもある。そんな中で大学生に必要なとされる学問的な基礎能力、そしてその教え方も大幅に考え直さなくてはならないだろう。ではこれからのアカデミック・スキルズで身につけるべき内容とはどんなものだろうか。ここでは以下の5つが考えられよう。

- (1) 分野を超えたものの見方
- (2) 教養に土台を置いた専門
- (3) より社会や時代性と密着した視点
- (4) さまざまな情報源を使いこなす能力
- (5) 効果的な発信能力

各内容を少し追ってみたい。学問分野が多様化し融合する現代では、理系と文系、学部と学科という縦割りを超えたものの見方が必要になってくる。このものの見方は社会でも現在求められているものでもある。技術倫理やCSR(Corporate Social Responsibility)という最近のキーワードが示しているように、すでに技術はそれを使うことで、社会や人々にどのような影響を及ぼすのか、という未来へのまなざしを考慮に入れて初めて新たな技術として認められるわけであるし、最近の企業は環境問題、社会貢献、消費者に対するインパクトなどを考慮に入れて活動していくことが義務となりつつある。このことからわかるように、専門と呼ばれるものはその周辺のみならず、そこでの新たな提案や発見が社会・環境・人間にどのような影響を与えるのか、という分野を超えた考え方を土台において初めてその専門性が認められる時代となっている。その訓練の基礎は社会に出る敷居にいる大学生にこそ経験してもらいたいという社会的な要求がますます増してきている。

おそらくそのようなものの見方こそ、「教養」と呼べるものだろう。このようなものの見方、あるいは学問に対する姿勢を身につけることは、専門に進んでいく前のゆるぎない土台となる。

また、今まで見たように社会との共生と社会への貢献が教育の中で強調されはじめている。学問が社会の状況から乖離することなく、大学や研究所の中で起こっていることが、常に発信され、社会へと反映されていくことが期待される現代では、学問のあり方の議論に社会や企業が積極的に関わっていくのみではなく、教育の現場として社会や地域が積極的に自らをひらき、学生の育成に関わっていかうという姿勢が見られる。そのような社会に応え、協働していく方法も重要な学びのスキルとなるだろう。

そして先にも述べたようにさまざまな情報源をいかに使いこなすか、インターネットからの情報に関しても信頼できる情報をいかに見極めるかのノウハウも早い段階に身につけておく必要がある。同時に教員やピア・グループとの情報のやり取りや議論の仕方もこの情報収集の中に入れて考えていかななくてはならない。

また、アカデミック・スキルズの中で重要とされるもののひとつに挙げられるのがプレゼンテーション・スキルである。つまり学んだことを発信する能力である。書かれた言語以外のさまざまな方法でプレゼンテーションが展開されるのが現代である。つまり、いかにわかりやすく、説得力を持って聞いている人々に訴えかけるのか、という能力が重要視されている。ここでは以下の点にこのスキルをまとめてみたい。

- (1) 言語による発信
- (2) 内容をキーワード化してとらえるまとめ方
- (3) 身体的なプレゼンテーション能力
- (4) ビジュアルに訴えるデザイン性
- (5) 高度なITリテラシーと技術の変化に対応していく柔軟性と好奇心
- (6) 社会への視線

(1)はもちろん基本的な能力としてもっとも重要な土台であるが、これに加えてより内容をわかりやすく伝えるスキルがさらに必要とされている。つまり言いたいことの内容をあらかじめキーワード化してみることで、ボディ・ランゲージやアイ・コンタクトを活用して、身体的にも観客に語りかけること、パワーポイントを使うのみではなく、画像や動画、パワーポイントのスライドのデザイン性など、身体的なプレゼンテーション能力を支えるビジュアルな工夫、そしてそのようなプレゼンテーションを支えるITリテラシー能力とさまざまなソフトの駆使能力、同時にそのような技術への好奇心、といったものである。同時に重要なことは、自分たちの研究テーマと研究成果がどのようなインパクトを自分たちの住んでいる社会に与えるのかといった未来志向の視点であろう。つまり大学教育と社会との連携が深まるにつれて、内省的な視点を土台にしつつも、それをいかに外部へとひらいていくのかといった視点がすでに大学レベルで要求されるようになってきているのである。

3. 新しいスキル構築の中で抜け落ちていくもの

しかし上に挙げたようなスキルズやプレゼンテーション能力を身につけることに専念する中で、どうしても抜け落ちがちのものがある。学ぶことの多さと技術革新のめまぐるしい移り変わりについていっただけでも、時間はまったく足りない。つまりひとつのテーマにじっくりと時間をかけるということ、そして時間をかけて自分の行っていることを客観視する姿勢がまず失われてしまうのだ。

同時に技術革新の中でもっとも大きな変化のひとつと思われるのが、成果にたどり着くまでの軌跡を残していくことが難しいという事実である。コンピューターによる文書作成では、推敲の軌跡を残しにくい。つまり自分の学びの足跡を残せないということである。このことは学ぶ側にとっては非常に大きな痛手である。昔は

原稿用紙に下書きをしたあとで、そこにさまざまな書き込みを行い、最終的な原稿を練り上げていった。その推敲の過程の記録はあとで自分の研究を客観視する上で、そしてさらにより研究方法を見出していく際に非常に重要となる。その過程がまったく抜けてしまっているのだ。同時に何度も推敲する過程は文章をまとめ、構成していくスキルの非常に有効な鍛錬になる。構成を見直したり、言葉を入れ替えたりする過程は書き込みながら行うことがもっとも有効である。ビジュアルな要素が活用されるからだ。しかしこの過程が見えてこないことは、文章を書く力にも大きなマイナスの影響を与えてしまう。

こういった要素の欠落は学びのゆとりの欠如と同義なのかもしれない。手っ取り早く情報を仕入れ、推敲にあまり時間をかけずにまとめていくことは、それはそれでひとつの時代の要請かもしれない。しかしこれでは情報源の信頼性の精査に時間をかけることができないだけでなく、多くの障害を学生に与えることになってしまう。同時にもっと大きな問題は、教員がそういった状況を十分に認識していないということだろう。実際に教員の意見に耳を傾けてみると、次のような学生の問題点を指摘する。

- (1) 最近の学生は文章が書けない
- (2) 批判的な能力に欠ける
- (3) 読解能力が落ちてきた
- (4) インターネットからのコピー・アンド・ペーストが横行する
- (5) 本を読まない
- (6) 図書館を使わない

しかし以上のような問題点の原因は、まず上で挙げたゆとりのなさや学習環境の変化と大いに関係があることを忘れてはならない。そのことにまず教員が気がつかなければ大きな学びの悪循環を生み、問題は一向に解決されないのである。

4. 新しい授業と教員の意識改革の必要性

現在慶應義塾大学では各学部・各研究所でこのような学習環境の変化に応じたさまざまな授業を開講し、学生たちのアカデミック・スキルズを伸ばそうと努力している。同時に重要なことは教員に対する働きかけだろう。まず教える人々の意識を変えることが必要なのだ。では、学生の抱えている問題点を解決するために、教員はどのような点に心を砕くべきであろうか。筆者が考えるものには以下のものがある。

- (1) 学生を知ること → 今の学生にとって「情報」とは何なのか
- (2) 学生の学習環境を学ぶこと → 遠隔学習と対面学習のバランスを考えること
- (3) 学生の躰きを学ぶこと → 学生を取り巻く生活環境を知ること

同時に教員が研究と教育のバランスをとれるようにすること、つまり教員自身が教育と研究のバランスをとりながら余裕を持ってこのふたつの活動に取り組めるような環境を整えることが非常に重要になってくる。時代の変化に対応することは教員にとっても実に大変なことだからだ。

慶應義塾大学教養研究センターはこのような教員のサポートを行いながら、意識改革をはかってもらうために2007年度に以下のようなワークショップを開催した。

(1) メディア・センター(図書館)活用術ワークショップ

ここでは教員対象に、教員として研究者として、どのように図書館を活用できるかのワークショップを展開した。本に代わり電子媒体が数多く導入されていく図書館では、その活用も教員にとっては新しいスキルを要する。教育で活用するのみならず、研究者としても有効に図書館のデータを活用してもらう方法を伝授することがこのワークショップの主眼である。

(2) 社会調査法(フィールドワーク)入門ワークショップ

昨今の学生たちは文字情報だけではなく、実際に現場に赴いてその目で状況を見て、聞き取り調査を行うことも多くなってきた。これは最新の情報を得るためだけではない。自分の足と目で調査し確認することによって、あらかじめ得た情報の信頼性を精査することができ、また新たな情報を付け加えることもできる。このような社会との直接的な接触は、調査のみならず現在多くの学生が参加しているNPOやNGOの活動でも頻繁に見られるようになった。インターネットの活用が一般化する昨今ではフィールドワークはますます重要なスキルとなってくるだろう。新たなアカデミック・スキルとしてこのフィールドワークを考慮する必要もあろう。そのための基本的なマナーや教育者としてのサポートの仕方を知るためのワークショップである。

(3) keio.jp 活用術ワークショップ

このワークショップでは、慶應義塾のIT教育支援システムの使い方をワークショップ形式で学ぶ。慶應義塾大学ITC(Information and Technology Center)が開発した教育支援システムは、自律学習のプログラムを組み立てるだけでなく、学生たちの出席・宿題・レポート・成績管理を行える。ITリテラシーに対してアレルギーのある教員に最初の一押しをするためのワークショップである。ITのサポートシステムとクラスでの対面授業をどのようにバランスよく自分の教育に盛り込んでいくのかが、これからの教育と研究の鍵となってくる。そのための入門ワークショップである。

(4) 「学生を知る」ワークショップ

現在の日本社会が抱えているひとつの大きな問題が人々が抱える不安と閉塞した精神的状態である。数多くの人々が鬱や引きこもり状態に苦しんでいる社会状況は、大学にも投影されている。毎年多くの学生たちが精神的な病に苦しんでいるのだ。同時に学生の学習障害も今までのところ表立って議論されていない。「学習障害」

はあるものは、重大な障害として認定されるし、あるものは精神的な不安から来る一時的なものでもある。情報源が多岐にわたり、コミュニケーションのあり方が大きく変化してくると、同時にその波についていくことのできない学生が数多く出てくることは当然であり、ある意味で障害の程度に関わらず、躓いている学生のサポートシステムを大学が用意していないこと自体が大きな問題でもある。「学習障害」とはどのようなものか、すばやく変化していく学習・生活環境が学生の学びと生きていくことそのものにどのような障害を生み出しているのか、そしてそのような躓きや障害に教員はどのように対処したらよいのか、といった問題に対する意識啓発のためのワークショップである。

もちろんこれらのワークショップではすべての学びの問題を網羅したことはない。そして新たな授業を開発するにしても、教員の自覚を促し、研究と教育をサポートするにしても、このようなコンテンツやスキル構築、意識改革だけではやはりだめである。人に働きかける以外、実際の空間としての「学びの場・生活の場」としての大学のあり方をまず考える必要がある。

そのために必要なことが、教員、学生が図書館、ITC、そして学生の相談窓口である部署、カリキュラムや履修などを統括する学事担当部署などと協力することである。新しい授業を開発し、さまざまなワークショップを開催するにもこれらの協力体制が必要であるが、その協力体制をよりネットワーク化し、もっと広く「学びの場」としての大学のあり方と空間を考えていく必要がある。つまりバーチャルではなく、実際に人が集い、語り、学ぶ場所の構築である。



5. 学びの場・生活の場としての図書館の役割

学生は勉強で困ったことがあったときに教員や友達以外、どこに相談しに行くのだろうか。事実、学習の基本的な問題についてさえも学生はどこに相談しに行ったらよいのかわからないために、同じ質問でありながら異なった学生が、さまざまな場所に聞きにいっていることが慶應義塾大学でもわかっている。つまりある者は図書館へ行き、ある者はITC、学事担当部署、学生相談の窓口である学生総合センターなど、実にばらばらなのだ。

どうしてこのようなことが起こるのだろうか。学生は自分の躓いている実際の箇所とその原因がいったい何なのかがわかっていないことが多い。同時に教員のアドバイスが適当でない場合もある。学生の躓きは単なる理解力の問題ではないこともあるからだ。精神的悩みや学習障害が躓きになっていることもあるだろう。また実際には教員が個人的にすべての学生の悩みや問題に答えられるわけでもない。

そのためにも上で述べたようにさまざまな組織や人をつなげた「学びの場」の構築が有効となる。つまり、教員、学生、図書館、学生相談室、学事担当部署、ITC、他キャンパス、および各研究所の研究者が協力して学びの場と生活の場としての大学環境を考えることで、それぞれのリソースを活かしながら、学生がどの場所に質問に来ても、各部署が協力し合って個別の問題に

対応することを可能にするシステムである。そしてその中心となりうるのが図書館である。図書館は集い、調べ、発見し、話し合うすべての機能をそこに持っているからである。

学生はまずピア・グループとともに助け合うことで互いに学ぶことができる。そしてこのことが、もっとも理想的な学びの場であろう。そのためにはまず「いてもらう」ことが大切だ。図書館はその意味で学ぶだけでない、居場所として大学生活の中心となりうる。そのための環境として大切なインフラには、以下のようなものが考えられる。

- (1) ディスカッション・スペースとサイレント・スペース
- (2) 飲食コーナー
- (3) もっとゆったり快適に本を読める空間と設備
- (4) 新たな資料の確保

図書館をなるべく自由に出入りできて、友人たちと気楽に話ができる場所にするためには、もっと気楽に入れるようにすべきであるし騒いでよい場所とサイレント・スペースとの差別化を図ればよい。同じく自由に軽食が取れる場所を設け、従来の机と椅子以外に学生がゆったりと読書できるようリビング・ルーム的な空間を用意するとよいであろう。また、セキュリティ上なかなか難しいかもしれないが、週末と夜間にかかわらず使えるシステムを導入し、学問領域の拡大とともに今まで図書館の蔵書対象となつてこなかった資料もぜひともそろえて欲しいものだ。つまり漫画やアニメーション、映画などさまざまな「テキスト」の確保も考慮して欲しい。学問の対象は日々広がり、互いの領域を超えてつながりつつあるのだから。

以上が空間としての、施設としての図書館だとすれば、従来のサービスに加えてどのようなサービスが考えられるだろうか。ここでは「学びと生活の場」としての図書館の将来を考えた場合、

新たな人的配置が考えられるだろう。

- (1) 困ったときの相談コーナー
- (2) 学習アドバイザー
- (3) ピア・メンタリング制度

これらは教員や専門職員だけではなく、大学院生や学部上級生たちと協力しながら、組み立てられるプログラムである。学生たちの学びの躰きは、上で挙げたように、非常に多岐にわたる。その窓口を一括してどこかの組織内に立ち上げることで、たとえばある問題は図書館、ある問題は学生支援の組織、ある問題は実際の科目履修に関わる学事担当部署、あるいはITCなどにその場でつなげていけばよい。また簡単な質問に関しては、年齢も近い学部生や、専門分野を学ぶ大学院生たちが指南した方が、より効果的な場合もある。アドバイザーとなった学生としても学んだスキルを実際に「教える」ことで、より深くそのスキルを「学ぶ」ことができるわけで、まさに「半学半教」の絶好の機会となる。このようなアドバイザーやピア・メンターとしての学生の導入は、最初のシステム作りとトレーニング・プログラムの構築のときは大変かもしれないが、きっと大きな効果をあげることと思われる。また各部署が協力し合うことで、アドバイスを受ける側にも与える側にも大学に対する大きな帰属意識が生み出されることであろう。

同時に、学びのスキルを全学的な取り組みとして教えるためには、必要なときに各スキルを学べる、あるいは学び返せるような学習コースの設置も必要である。海外では独立機関として確立しつつある Center for Teaching and Learning の役割は、図書館との提携で行われることが非常に多く、図書館の中にコースが用意されている場合も多々ある。ここでは単位化されない、自立学習者となるためのコースをそろえておき(問題の発見、情報の検索などの基礎スキルズからライティング、プレゼンテーションなどの個別スキル構築までを含む)、学習者が必

要に応じてコースを取れるようにするとよいだろう。これらのコースでも学生のアドバイザーとしての導入が可能である。

このような制度やプログラムは教員・職員・学生が一緒になって作り上げていくものであり、そこから学びの場・生活の場としてのキャンパスが立ち上がっていく。まさにさまざまな組織が協力し合って作っていく対面式の場の創設である。その際に図書館の果たす役割は、中心的なものとなるはずだ。

6. 「知」の伝達の場としての図書館

しかし、忘れてはならないのは、「本来の」図書館の機能である。それは「知」の宝庫であり、「知」の守り手であり、「知」の次世代への伝達者ということに他ならない。つまりこれだけバーチャルで視覚的かつ一時的・一過性の情報が氾濫する世の中だからこそ、手に触れて、読むことのできる、あるいは見て楽しむことができる「蔵書」こそがやはり図書館の命なのだ。

その意味で新しい世代に伝えなくてはならないことは、宝としての「本」の魅力を徹底的に学生たちに味わい尽くしてもらうことである。そのためには図書館を中心に、「本を読む」ことの魅力を再検討して欲しい。つまり、「本を読む」ことはなんといっても身体的な行為であるということだ。表紙に触れ、その重みを両手で感じ、紙の匂いをかぎ、その厚みに触れ、古い本の場合は、袋とじになった折丁をペーパーナイフで切りながらページを繰っていく。昔の本の場合は、はっきりと印字の凹凸を紙の上で感じることができる。また、表紙のデザインだけではなく、「見返し」に使われている紙の面白さに見とれたり、装丁のつくりや紙面のデザインにも注目してみる。このように「本を読む」ということは、ただ文字を追うだけではない五感を使う行為であり、同時に触れることを介した非常にセクシュアルな行為でもある。作る側にとっては、それはひとつの「建築」であり、読者はしばしその建物の中に住まうことにもなるのだ。まさに

「知」の棲家なのである。このように物質としての本と実際に対峙することの醍醐味をまず図書館は伝えなくてはならないのではないか。そのためにはどのようなことができるのだろうか。

まず貴重書をもっと身近な存在にして欲しい。また、各図書館の所蔵する、これぞという「宝」に大学1年生のときから触れられるような環境を作り出すべきだ。そのためには教員も積極的に図書館の所蔵品を各自の授業で用い、学生に見せ、触れさせる機会を作るべきだろう。過去からの連綿たる知の伝承は、こうして今まで受け継がれてきたのであり、過去からの遺産に若いうちから身体を介して接することは、ただ「本を読む」以上の意味を持つはずである。それは知の伝承の義務感、ともいえるものを学生に植え付けていくはずだ。同時に図書館はこれらの蔵書を社会へと公開していく役割も持つべきである。「宝」はしまっていては意味を持たない。使われて初めて光輝く。特に知識はその最たるものである。実際に「知」に触って使ってみることの大切さを若いうちから身に付けてもらい、社会人になってもその感触にいつでも戻れるようにすることが、大学の使命であろう。

同時に本は外から見ることでその内容を推し量られるものでもあるので、「蔵書をどう見せるか」ということも大切な課題となる。書架のデザインやスペーシング、ブラウジングの楽しさを助長するような空間作り、電子版と実際の本のそれぞれの魅力の打ち出し方、など図書館の未来はまだまだ広がっていきそうだ。バリア・フリーの問題も忘れてはならないだろう。

古く、しかも新しい図書館のあり方を考えること。これは図書館を使う人すべての問題でもある。まずは、学生・教員・職員・そして社会人も交えた徹底的な話し合いの場を作ることが最初の一步となりそうだ。そしていまひとつ重要な視点は、「変わる」ことの意義である。社会が変わるから大学も変わる。しかし、社会をより

よく変えていくこともまた、大学の使命である。
そのためのアゴラがこの新しい「学びの場・生活

の場」となることを期待したい。

◆図書館は「生活の場」！？(横山先生の講演を伺って)

学生が図書館に抱くイメージは、「騒いではいけないところ。置いてある本はお堅い内容。勉強をするところ。友達と待ち合わせることはない。」だそう。だが学生が期待している図書館は、これらを裏返したものらしい。先生の講演を伺い、これからの大学図書館像を考えるときは、頭の中を一旦空にしてみようと思った。

コミュニケーション方法や情報源の変化に伴い、学生も変化しつつある。慶応義塾ではその現状を受け止め、さまざまな改革をしているそう。学生には学び方を学ぶ講義「アカデミックスキル」、教員には学生の学習環境、生活環境を理解するためのワークショップを開催しているらしい。学生が変化しているのだから、私たちも変化しなければならない。「学びの場」であり、更に「生活の場」としての大学を考えたとき、図書館はその中心となりうるそう。図書館は可能性の宝庫ではないだろうか。学生が当たり前

のように足を運ぶ図書館になるにはどうしたらいいのか。静かな図書館も好きだけれど、学生たちで賑わう図書館もいい。先生の講演は、図書館を前向きに考えるきっかけとなった。「生活の場」という視点を、新たに持ちたい。

講演の後、日吉メディアセンターを見学させていただいた。ちょうど図書館ガイダンスを行っており、講師がマイクを使用していた。周囲の学生にもPRする効果があるらしい。「図書館では静かに」というイメージを、見事に壊された。変わりゆく図書館を、目の当たりにした一日だった。

横山先生、理工学メディアセンター、日吉メディアセンターの皆様、どうもありがとうございました。

(文教大学湘南図書館 田所 恵理子)

◆平成20年度総会議事報告

当日の出席は32館36名、委任状提出11校で、会則第9条第3項に則り総会は成立しました。

議事は次のとおり進められました。

- 1 平成20・21年度会長館及び連絡館 承認
- 2 平成19年度事業報告
総会、実務担当者会、会報発行、共通閲覧証利用統計調査等のほか、ホームページの運用開始等が報告され、承認された。
- 3 平成19年度決算報告(次頁参照) 承認
- 4 平成19年度会計監査報告 承認
- 5 平成20年度事業計画案

諸会議、会報発行等、例年にならって活動を行うことが承認された。

- 6 平成20年度予算案(次頁参照) 承認
- 7 その他

- ・資料の保管期間について、今後は著作権上の了解を得た上でホームページ公開・保存し、発行後1～5年間のものは現行の「すべて保管」から「20部保管」へ変更することについて提案があり、承認された。
- ・保管期間を過ぎた資料の廃棄報告
- ・会費納入依頼(【事務局報告】参照)

【平成19年度決算】

＜収入の部＞

1	前年度繰越金	629,857円
2	会費	220,000円
3	その他（銀行利息）	1,127円

合計 850,984円

＜支出の部＞

1	会議費	25,600円
2	事務費	33,215円
3	印刷・製本費	91,245円
4	研究活動費	20,000円
5	予備費	0円
6	次年度繰越金	680,924円

合計 850,984円

【平成20年度予算】

＜収入の部＞

1	前年度繰越金	680,924円
2	会費	220,000円

合計 900,924円

＜支出の部＞

1	会議費	70,000円
2	事務費	70,000円
3	印刷・製本費	100,000円
4	研究活動費	60,000円
5	予備費	600,924円

合計 900,924円

以上

【事務局報告】

◎ 調査の実施

- ▶ 名簿記載事項確認調査
- ▶ 平成19年度共通閲覧証による相互利用統計調査

上記2件の調査について6月17日に会員館に依頼、回答をもとに「神奈川県内大学図書館相互協力協議会会員館名簿(平成20年度)」および「同 共通閲覧証利用統計(平成19年度)」を作成、7月22日に送付しました。

◎ 平成20年度会費徴収報告

会費納入について5月22日の総会にて依頼し、10月10日に全会員館からの入金を確認いたしました。

◎ 神奈川県内大学図書館相互協力協議会
ホームページ <http://www.kulc.net/>

メーリングリスト

全会員館用：kulc@kulc.net

連絡館用：kulc-r@kulc.net

※登録アドレス、名簿記載事項の変更は事務局までご連絡ください。

◎ 平成20年度実務担当者会開催について

会長館ならびに連絡館で、下記の趣旨で開催を検討しています。

日 程：平成20年12月上旬

場 所：慶應義塾大学

理工学メディアセンター

テーマ：現場に生かす

フォーカスグループインタビュー

開催要領の詳細が決まり次第、別途メーリングリストにて参加者を募集します。多数の皆様の参加をお待ちしています。